

「私とおじいちゃん」

神奈川県 山田遥

祖父母の家に行く度に祖父は、
「もう中学生になったのか」

と言います。私は今年で高校 2 年生になりました。祖父はアルツハイマーです。家族の名前や顔は覚えているものの、何度も同じ事を言ったりささいな事はすぐに忘れてしまいます。

今年の夏も、祖父母の家へ遊びに行きました。温かい笑顔で迎えてくれた祖父は、やはり私の事を中学 1 年生だと思っていました。祖父は植物栽培が趣味で、今年はずっといちご栽培の話聞かせてくれました。

祖父母の家に滞在して数日たったある朝、家の中は騒然となりました。祖父の姿が見えないのです。その時集まっていた親戚一同で近所に探しに行きました。その時私は祖父がこのまま見つからなかった時のことを考えて怖くて仕方がありませんでした。泣きたい気持ちを抑えて探し回り、ついに祖父を見つけました。そこは小さい頃祖父と二人で訪れた公園でした。私に気づいた祖父は優しい笑顔で、温かい声で私の名前を呼びました。張りつめていたものが切れてどうにもこぼれる涙を止めることができませんでした。そんな私を祖父は笑っていました。

「もう中学生なんだから泣かないの。」

帰り道、久しぶりに祖父と手をつないで帰りました。あったかくて大きな手でした。家についてすぐ、祖父は私にいちごをだしてくれました。忘れっぽい祖父が毎日欠かさず水をあげて大事に育てたいちごは甘くて、でもどこかすっぱくて、消化されることなく私の中に残っています。

そのうち祖父は私の名前を忘れてしまいます。私が誰だかわからなくなってしまいます。祖父にとって私が孫でなくなっても私の祖父は祖父だけです。名前がわからなくなっても、孫だと認識してもらえなくても、いちごを食べて笑い合えばいい、そう思えるのです。ね、おじいちゃん。